

2025年度 神奈川県重症心身障害児者関係施設協議会

関係機関との連絡会 議事録

日 時 2025年11月14日(金)

時 間 14:00～16:30

場 所 神奈川産業振興センター 13階
第2会議室/Zoom(ハイブリット会議)

1 開会の挨拶、オリエンテーション 14:00～14:10

会長 水口 浩一氏 (ライフゆう 施設長)

- ・先日、守る会の方が主催の学習会へ招いていただいた。「どうなる。入所施設」をテーマに今後のことについて一緒に考えることができた。「どうするの、どうなるの、どうしたらいいの、どうしたいの私たち」と変わっていくのではないかと感じた。
- ・今日の連絡会は、各論的な話になると思うが、「どうしたいの私たち」と考えたときに、イメージーションが必要になってくる。
- ・8年ほど前に河幹夫さんの講演会へ参加した。印象的な話として医療と福祉の違いについて、そばで説明した内容がある。利用している人がそばを食べたいと言ったときに、医療は出前を頼む。福祉はそば屋を作る。そのアプローチの違いが医療と福祉の違いだと話しをしていた。これまで、自分はデリバリーでいいじゃないかと思っていたが、講演会の中で双方を否定することはなく、考え方の違いがあると聴き、感じ方が変わってきた。福祉は、なぜそば屋を作るのか、想像力を働かせると、そばを食べたい人が、食べるだけではなく作る過程をみたいなど体験や共感も含めて考えることが福祉ではないかを感じるようになった。

2 関係機関との連絡会

1)神奈川県による昨年度から現在までの施策に対する進捗状況等の説明 14:10～14:40

- ・今後の県立障害者支援施設のあり方について
- ・過齡児対策について

障害サービス課福祉グループ 今副主幹

→9月の連絡会にて入所調整についてお話をさせていただいた。様々なご意見をいただくことが

できた。リスト化については反対する意見はなく、方向性については、このまま進めていきたいと考えている。

・地域福祉課災害福祉グループの新設について

別紙行政説明資料参照

水口会長

→令和6年度に大規模地震医療活動訓練が神奈川県で行われ、ライフゆうで会議が行われた。DMATの方にも来ていただき、能登の話なども伺った。顔と顔を突き合わせて話をすることで、お互いにイメージが湧くし、必要なことの理解しも合える。今後ともよろしくをお願いしたい。その話の中で、能登では介護も医療も情報がグチャグチャだったとあった。統一した情報伝達については大きな課題であり、神奈川でも介護や医療の情報共有システムができていけばいいと感じた。

地域福祉課 災害G 安井氏

→今年度もビックレスキューなどで訓練に参加させていただいている。顔の見える関係は非常に重要だと考えている。情報共有については、様々なチームがある中で、どのような共通のフォーマットを使用して情報共有を行っていくのかを国としても県としてもしっかりと取り組んでいきたいと考えている。

2) 重心協から報告(重症心身障害児者を取り巻く現状と課題/事例報告) 14:40~15:10
重症心身障害児者を取り巻く現状と課題「地域での暮らしや活動、地域移行について」

- ・生活介護事業の運営について
- ・短期入所について
- ・地域活動等について
- ・地域移行の事例紹介(2例)

別紙重心協からの報告資料参照

3) 重心協からの質問事項についての関係機関からの説明・質疑応答 15:10~16:20
神奈川県、横浜市、相模原市、横須賀市、川崎市

別紙各行政機関からのご回答資料参照

守る会 谷口会長

→地域移行という報告が2か所の施設からあった。人材不足など、様々な課題があったと思うが、移行した後の結果について知りたい。

横浜医療福祉センター港南 根津センター長

→港南のケースでは、移行後、担当者が暫くは3ヶ月に1回グループホームへ訪問しご本人の様子を伺っていた。現状として、非常に生き生きとして楽しんでいただいている。

事務局 近藤氏

ゆう 前田氏

→2例目のケースでは、同じ法人内での移行ということもあり、ご本人についての情報共有がスムーズに行えた。また、職員が事業所を跨いで勤務しているため、ご本人の様子を情報交換したり、入所の医師が定期的に診察へ行き様子確認をしたりしている。同法人だからこそ出来るフォローを行っている。

ご本人は、移行してからまだ日が浅いが、食事もしっかり召し上がり、やるも眠れており、落ち着いて過ごされている。

横浜医療福祉センター港南 根津センター長

→行政の方へ、地域移行支援で重症心身障害の方もグループホームなどの生活スタイルを徐々に増やしていきたいという中で、様々な加算を検討していただき、非常に心強い。実際に様々なケアがある中で喀痰等の研修を受けている方のニーズはどのくらいあるのか。また、人材の担い手を育成しているのか。

障害サービス課福祉グループ 今副主幹

→人数については持ち帰り確認してお伝えしたい。

守る会 高山氏

→質問ではなく意見になってしまうが、報酬について、良い方に行くのではなく改悪のような形になり、全国の事業者が廃業しているとか、グループホームも経営難であるとか、人材不足と聞いている。今話し合っていることと現実の矛盾点がある。重心の方が地域へ出るには、まだまだ地域の基盤整備がなされていないことに親として不安を感じる。生活介護事業では、利用者に日割りなどの形で報酬が出ていたが、今は時間でとなっている。これでは事業が成り立たない現状を国へ伝えていかなければと思っている。重い障害の子が事業所に通えず、家で過ごす状況になってきている。

障害サービス課福祉グループ 今副主幹

→地域生活移行を進めることと、実際の資源について乖離があることについては承知しており課題であると認識している。関係団体の方からは施設をと要望受けていた。県としては地域に根付いたグループホームで何とかやっていきたいと考えている。グループホームが1つ

できただけでは地域での生活を支えることは出来ない。関連する資源を充実させなければならないと認識している。関係者の皆さんと連携しながら1つずつ進めていきたいと考えている。

事務局 近藤氏

→重心協の中でも様々な地域の施設事業所が加盟しており、地域ごとのばらつきがある。ご利用される方、また、そのご家族が行きたい事業所や、グループホームへ行くことができることが理想だが、現実としては難しさもある。重心協からの現状報告などを通して情報交換し、良い方向へ向かっていきたい。

今回、地域移行として2例紹介したが、制度設計として、グループホームの見学や体験について加算があるが、療養介護施設から利用者の方を外へお連れすること自体にハードルがある。事例報告では上手くいった報告をしたが、ハードルがある部分や利用者の方自体が行きたい場所がないという場合もある。まだまだ課題があり、このような場で意見交換を出来たと思う。

障害サービス課福祉グループ 今副主幹

→報告の中で、(療養介護の方が)生活介護を経験したとあったが、制度的には出来ないことだと思うが、どのような形で経験されたのか。

ライフゆう 天野氏

→同法人の生活介護事業所であったため、外出として生活介護事業所へ遊びに行くという形で経験を重ねた。横須賀市に関しては、体験利用の受給者証の発行をしていただけだが、そもそも重心の方を受け入れてもらえる事業所が少ない。受け入れ先を探すところから始まったが、見つからず、同法人内での対応となった。

施設へ入所すると、在宅で使っていたサービスが全て使えなくなってしまう。入所するとお終いという考え方があるように感じている。入所されている方についても、これから考えたときに一緒に考えてくれる人が多いことや、様々な情報提供ができればよいと感じている。

障害サービス課福祉グループ 今副主幹

→今回、移行を進めるにあたっての切っ掛けはどのようなことだったのか。また、医療度については移行に関係してくるのか。

ライフゆう 天野氏

→重心の方が、家で見るのが難しくなり、最終的な場所が療養介護となってしまうように感じる。重心の方も様々な方がおり、集団での対応ではなく個別の対応が必要であったり、自分で動ける方であったり、若く活動的な方であったりと、支援する側からみて療養介護

では「ここでいいのか」と感じることもある。毎日どこかへ出掛けられたらという考えになり、グループホームへの移行となった。

医療度については、自分で何かできたりなど、医療度が高い方よりも低い方の方が多いように感じる。

守る会 谷口会長

→現在、娘がソレイユ川崎へ入所している。20年位前にグループホームという言葉が出てきた。その当時は、グループホームの方が入所よりもいいかと考えていた。その後、娘の体調が悪くなったり、通院することを重ねて、今はグループホームではなく、医師や看護師がすぐ傍にいる施設でよかったと感じている。ソレイユ川崎の中でも、グループホームの方がいいのではと思う方もいる。

施設から地域へという言葉があるが、施設も地域の一員だと思っている。施設へ入っていることを責められているように感じる。全員が施設から出られるわけではないと思う。そういった事を考えた言い方や施策をお願いしたい。

障害サービス課福祉グループ 今副主幹

→施設で生活されている方全員がという考えではなく、別の生活が望ましいという情報もある中で、施設が必要な方と同様にグループホームも充実させていきたいと考えている。

事務局 近藤氏

→施設も地域の一員だと考えている。これからも、施設を利用されている方も含め、住む場所や、活動なども選択肢が広がり選べるような関りをしていきたいと考えている。

グループホームの話の中で、グループホームと生活介護は1つのセットとして考える必要があると感じた。グループホームへの移行を考える上で、生活介護も体験できるような支援体制も考えていく必要がある。

3 神奈川県重症心身障害児(者)を守る会 挨拶 16:20～16:25

会長 谷口 久美様

・新型コロナウイルス感染症が流行っていた時には、会議が開催されないこともあったが、改めて開催されることとなり、参加させていただきありがたい。今後ともよろしくお願いいたします。

4 閉会の挨拶 16:25～16:30

副会長 村上 研一氏（ワゲン療育病院長竹 施設長）

村上副会長欠席のため、横浜医療福祉センター港南 根津センター長よりご挨拶をいただく。

・重症心身障害児者の医療福祉の現場は重症化、高齢化が進み破綻しかかっているように感じる。

- ・生活介護においては、欠席率が高いことや遠方への送迎依頼があり負担が大きくなっている。
- ・入所では、港南の入所者は7割が超準超重症児者となっている。看護師が10対1や7対1では対応が出来ないような状況となっている。
- ・グループホームだけではなく、生活介護やケアハウスも一緒になっており、慣れ親しんだ方にケアしてもらい、ショートステイも対応できるような体制を整えば、障害者権利条約の目指すインクルーシブな対応が出来るのではないかと感じる。
- ・横浜では、24時間対応の訪問診療が増えている。非常に心強く感じている。どんなに重たい障害があっても選択ができるような制度ができるように、行政の方とも一緒に歩んでいきたい。